

患者と関わりながらより個別に迫る手段を選択していく看護者の判断過程

日高真美子（基礎看護学）

【キーワード】 看護実践, 生活調整, 患者の個別性, 個別な手段選択, 看護者の判断

本研究の目的は、患者と実際に関わりながら、より個別に迫るケア手段を選択していった看護過程における看護者（自己）の認識を分析し、より個別に迫る手段を選択していく判断過程を明らかにすることである。

研究対象は、患者と実際に関わりながら、より個別に迫る手段を選択していったと思われた3事例9場面の看護過程における看護者（自己）の認識である。

研究方法は、より個別に迫る手段を選択していったと思われた看護過程および場面中の看護者の認識につながるそれ以前の事象を再構成し、各場面毎に場面の意味と看護上の意味を取り出した。次いで、患者の全体像や個別性を見つめる手がかりとなる患者の反応等を整理し記述した後、各場面以前に看護者が患者をどのようにとらえていたのかを記述した。分析フォーマットを作成し、各事例毎に看護者の認識の働かせ方とその流れに着目しながら看護者の判断過程の変遷を追った。判断の転換点を見出し、そのとき、描いていた患者像がどのように変化したのかを抽出し、より患者の個別に迫る判断過程の特徴を明らかにした。それらの共通性・相異性を検討したところ、どの過程にも共通した判断過程の特徴として3項目あることが明らかとなった。その内容を以下に示す。

1. 患者の反応から生活調整の必要性を見出したときは、その反応を健康な人間の生活一般に照らし、これまでの患者の生活過程を重ねて、患者の反応の意味をとらえている
2. 患者の反応の意味をとらえられたときには、その反応の意味をもとに、看護一般に照らし生活調

整の目的が果たせるよう、実体の力と認識と社会関係とのつながりに着目して全体像を描き直し、生活体としてのより個別なあり方が浮き彫りになると、より個別に迫る手段を選択している

3. より個別に迫る判断過程が促されたときには、五感を使いながら患者の生活過程を我が身に重ねて心から消耗を感じ取り、その問題解決は看護の役割であると自覚し、自ら整えたいという願いが立ち上がっている

以上の判断過程の特徴を考察したところ、本研究過程により、患者と実際に関わりながら、より個別に迫る手段を選択していく判断過程が明らかとなり、看護実践における指針として活用できることが示唆された。